

〔論 文〕

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下の 保育現場における協働と人間関係の諸相

—食と園内での学びを視点として—

遠藤 純子・小野 友紀

The Influence of the COVID-19 Pandemic on Collaboration and Relationships among Staff and Children in Childhood Education and Care Institutions: Eating Behavior and Professional Development

ENDO Junko and ONO Yuki

In this study, through the analysis of group interviews with nursery teachers and principals, we examine relationships and collaboration during the COVID-19 pandemic from the viewpoint of eating behavior and professional development of children in the childcare center. As a result, it became clear that communication among children, between children and nursery teachers, and among nursery teachers have all been negatively affected. Not only external changes such as changes in the training format, but also changes that are difficult to see on the surface, but which are felt by those who are directly involved in childcare, are occurring, causing in nursery teachers feelings of conflict, anxiety, and distress. We infer that teachers have been concerned with the effects of life under the pandemic on the children in their care. Because of the difficult situation in which nursery teachers and children find themselves, and because the effects of COVID-19 are expected to be prolonged, it is necessary for all involved to communicate and collaborate to create positive experiences for the children.

Key words: *human relationships* (人間関係), *COVID-19* (新型コロナウイルス感染症), *collaboration* (協働), *early childhood care* (保育), *eating behavior* (食)

1. 問題と目的

(1) 人間関係の育ちを支える基盤と協働

人が生きていくために、人との関わりは必要不可欠なものである。保育の場においては、様々な人との出会いがある。友達との出会い、保育者との出会い、地域の人との出会いなど多くの出会いに支えられ、子どもは人との関わりを学び、世界を広げていく。乳幼児期は自ら周囲の環境に関わる直接的な体験を通して心身が大きく育っていく時期であるが、そこには保育者との安心できる関係性の構築が欠かせない。幼稚園教育要領解説、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説、保育所保育指針解説における領域「人間関係」の解説部分に「人と関わる力の基礎は、自分が保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感をもつこと、さらに、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって培われる」と記載があるように（文部科

学省，2018；内閣府・文部科学省・厚生労働省，2018；厚生労働省，2018），保育の場では，保育者との信頼関係が基盤となり，周囲の人との関わりを深めるとともに，様々なことを自分の力で行おうとする意欲が育まれていく。こうしたことから，保育者は一人ひとりの子どもの姿を深く理解し，気持ちを受け止め応答的なやり取りを重ねながら，一人ひとりの子どもが保育者や友達と共に過ごす喜びを感じ，日々の生活や遊びが充実したものとなるよう配慮することが求められる。日々の生活や遊びが，子どもにとってふさわしい経験となっているかは保育の質に直結することである。OECDのStarting Strong VIにおいても，他児，保育者，空間や素材，家族や地域なども含む環境を通じた有意義なやりとり（meaningful interactions）が保育の質を反映するものであることが言及され（OECD，2021），こうしたプロセスの質と呼ばれる側面に国際的にも関心が集まっているところである。しかしながら，集団保育の中で環境との有意義なやりとりを子ども一人ひとりに保障することは，保育者個人の心もちだけでは難しい。野澤ら（2016）は，複数の保育者が複数の子どもたちを保育するという状況においては，保育者同士がいかに関係して子ども一人ひとりが安心できる関係状況を構成するかという点が重要であることを指摘しているが，子どもの人間関係の育ちを支えていく保育者間の関係性を考えることは忘れてはならない視点であろう。食事や睡眠等も含めた一日の生活の充実には，調理従事者や看護職等，職種間の相互理解や協働が欠かせないものであり，保育の場に関わる様々な人の関係性の上に子どもの豊かな経験は成り立っている。特に食事場面は，子どもの育ちや体調に応じた内容や形態での食事提供，アレルギー児への対応など，より一層の職員間の協働が求められる場面である。例えば食事場面で特定の保育者が担当の子どもの援助にあたることと，食事時間を調整することには関連があることが示されているが（遠藤・小野・池谷・田中，2022），一人ひとりに応じた援助を実現するためには職員間の共通理解や連携が不可欠である。園全体が良好な関係性のもとに協働していくことが一人ひとりを尊重した丁寧なやりとりへとつながると考える。

園内の協働が高まるためには，各職員が自由・率直に話し合えるような職場の土壌が培われていることが重要となる。職員の共通理解と協働性を高めることは，いかにして園内に保育を語り合う協同的な文化や風土を形成していくかという課題とも言い換えられる（大豆生田・三谷，高嶋，2009）。そうした取り組みの一つとして，園内研修が挙げられる。園内研修は園長などの管理職も含め同じ職場に集う者が時間と場を共有し，共通の目的のもとで行われる研修のことである（中坪，2018）。保育所保育指針には「職員が日々の保育実践を通じて，必要な知識及び技術の修得，維持及び向上を図るとともに，保育の課題等への共通理解や協働性を高め，保育所全体としての保育の質の向上を図っていくためには，日常的に職員同士が主体的に学び合う姿勢と環境が重要であり，職場内での研修の充実が図られなければならない」と記載されていることから，職場内での研修を通して，専門性を向上させるとともに，共通理解や協働性を高めることも重要であることが理解できる。さらに保育所保育指針解説において「初任者から経験を積んだ職員まで，全職員が自身の保育を振り返り，自らの課題を見だし，それぞれの経験を踏まえて互いの専門性を高め合う努力と探究を共に積み重ねることが求められる。このためには，同じ保育所内の職員間において，日頃から対話を通して子どもや保護者の様子を共有できる同僚性を培っておくことが求められる」と記載されており，職員間の対話が生まれる環境づくりが互いの専門性を高め合う土壌となると考える。上村（2019）は，職員間で互いにわかり合おうとする園風土が背景として潜在していることは，保育者が子どもと対峙した際にも，子どもと互いにわかり合おうとする情動的な志向性へと転化していくような好循環が生じている可能性を

示唆しているが、職員間に互いに支え高め合う関係性が築かれることは、保育者の成長と園全体の保育の質の向上に大きく関わるものである（厚生労働省，2020）。日々の生活が子どもにとってふさわしい経験となるためには、職員の協働性が高まっていることが重要であると考えられる。

(2) 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19と記す）は、2020年には世界各地で感染が拡大し、日本の保育現場にも広範に及ぶ影響をもたらした（野澤ら，2020），その影響は現在も続いているところである。保育現場では感染予防を講じつつ子どもたちにとってふさわしい経験の保障を考える必要があり、これまでにない対応が求められることとなった。特に食事場面は、飛沫が飛びやすく、感染リスクが高いとされる場面であり、感染リスクを下げるための配慮が一層必要な場面である。しかしながら、食事場面は栄養摂取だけでなく、コミュニケーションの場としての意味ももつものであり（外山，1998；富岡，2010），保育者や友達等と会話をしながら食事を楽しむ経験は子どもに安心感をもたらすものである。また、友達との関わりが深まるにつれ、食事のときに一緒に食べたいという気持ちが生じるようになり、友達と同じ場を共有しながら、一層食べることを楽しむようになっていく。人間関係が育まれることと、食べることを楽しむようになることとは密接に関連していることでもある。しかし、COVID-19流行下においては、食事での会話が飛沫感染のリスクとなることから、保育者や友達等と会話をしながら食事を楽しむことを、これまでと同様に保障することが難しい状況となっている。小田・橋浦（2022）は保育施設を対象としたアンケート調査結果から、「楽しく食べること」と「感染症対策」の両立は難しく、その間で様々な考えが生まれ、園ごとの対応に幅が生まれていることを指摘している。感染症対策をとりながらも、子どもにとって必要な経験は何か、失ってはならない経験は何かを考えながら、最善の答えを見出すことが困難な中で選択を迫られる保育者のストレスはいかばかりのことであろうか、現場にいる者にしか分からない苦悩があることと推察する。保育者がストレスフルな状態に置かれたとき、その支えとなるのは職員間の連携である。COVID-19感染拡大による未曾有の事態においては、これまでと異なる配慮を考えることや、前年踏襲を見直すことなど、職員間で議論すべきことが多く生じていることが想定される。しかしながら、密を避けなければならない状況では、職員が集まって対話を深めることにも影響が生じていることが予想される。

COVID-19流行下の保育現場における状況は、子ども同士、子ども－保育者、保育者同士といった様々な人間関係のあり方に変化をもたらしていることが予想されるが、具体的にどのようなことに保育者は悩み、困難を抱えているかを把握することが、保育現場への支援を考えるうえで必要であると考えられる。そこで本研究では、保育者・園長を対象としたグループインタビューの分析を通し、COVID-19流行下の保育現場における人間関係と協働の諸相について、食と園内における学びを視点として検討することを目的とする。

2. 研究の方法

(1) インタビュー協力者（表1・2）

本研究でのインタビュー協力者は、東京都・神奈川県内の保育所に勤務する保育者5名（A～E）、園長4名（W～Z）であった。COVID-19流行下では各園固有の状況があることが想定され、可能な範囲で異なる園の状況を把握することを目的に、保育者・園長ともに、異なる園に勤務する者を選定した。

表1 インタビュー協力者の属性（保育士）

	園の運営主体	入所児童数	経験年数	担当
A	株式会社立	61名	6年目	1歳児クラス
B	株式会社立	17名	10年目	2歳児クラス
C	公立	141名	24年目	地域コーディネーター
D	社会福祉法人立	120名	4年目	1歳児クラス
E	公立	101名	8年目	2歳児クラス

表2 インタビュー協力者の属性（園長）

	園の運営主体	入所児童数
W	社会福祉法人立	104名
X	社会福祉法人立	109名
Y	社会福祉法人立	103名
Z	社会福祉法人立	100名

(2) インタビュー方法

本研究では半構造化インタビューを方法として用い、Web会議システム Zoom を使用した。保育者対象インタビューは5名のグループ形式で、園長対象インタビューは4名のグループ形式で実施した。いずれのグループインタビューも所要時間は約90分であった。インタビュー実施時期は、保育者対象インタビューが2021年10月、園長対象インタビューが2021年11月であった。

質問内容は、〈① COVID-19 流行以前・流行下における園内研修の実施状況、②園内研修での苦勞や悩み、③ COVID-19 流行下での協働の変化、④感染症対策と食の場のコミュニケーションの両立、⑤外部研修の受講状況、⑥子どもにとっての食事時間とは〉を軸として進めた。本報告では、①③④の結果を分析に使用した。

(3) 研究における倫理的配慮

インタビュー協力者に対し、研究の意義・目的、研究方法、研究への参加協力の自由意志と拒否権、研究結果の公表方法、データは個人が特定されないよう匿名化され厳重に管理されること、研究に関する質問・意見の連絡方法について説明し、了承を得たうえでインタビューを実施した。なお、本研究は昭和女子大学倫理審査委員会の承認（承認番号21-22）を受け実施した。

3. 結果と考察

(1) COVID-19 流行以前における園内研修の実施形態（表3・4）

COVID-19 流行以前における園内研修の実施形態は、参加者全員が集まったの実施（A・D・Z）、小グループに分かれての実施（C・E・W・Y）、外部研修等を会議で報告（B）と園によって様々であった。頻度は月2回（D）、月1回（Y）、2か月に1回ほど（A）、1年に5回ほど（C）、3か月に1回（E）、年2回（Z）であり、園によってばらつきがあった。どの園でも常勤職員は専門職も含めて全員が参加していた。非常勤職員に関しては、全員参加（B・D）としている園のほか、フルタイムアルバイト・嘱託職員は参加（C）、非常勤も参加することが多い（A）、主に正規職員が参加（E）、非常勤職員は参加希望者のみ（W・Y）、パート職員はなかなか出ていない（Z）と、非常勤職員やパート職員の参加は任意参加としている園もあった。また、調理従事者は正規のみ（C・D）という園もあった。内容については、協働型研修¹（C・E・W）、伝達型研修（Z）、伝達型と協働型両方の研修を一年の中で実施（A・D・Y）、外部研修や読んだ文献等を会議で報告し共有する形（B）と、園によって様々であった。C・Eの園では、テーマを決め一年を通して深めていく形での協働型研修を実施していた。「学ぶことよりも、職員間が絆を深める時間として使っている」（A）、「グループごとに集まり、ざっくばらんに話し合う」「少人数のグループで互いの見方を共有している」（E）との語りからは、職員間の対話を通

じての相互理解を園内研修の中で重視していることが窺われた。さらに「ポストイットに書き込み、それを全員に見える形にしたり、保育のマインドツリーを作ったり」(Y)からは、意見を視覚化して共有しやすい形にすることや、意見を引き出しやすい工夫をしていることも窺われた。Bの園は小規模保育事業でありスタッフが少ないため「園内研修という形にできず会議をするのが精一杯」と園内での学びの保障の難しさが語られた一方で、「常勤だけでなく、パート、非常勤、調理も必ず参加できるようにし、全員で共有することを心がけている」と少人数ならではの「全員での」連携を意識していることが読み取られた。

表3 COVID-19 流行以前における園内研修の実施形態（保育者）

A	2か月に1回ほど、職員間で悩みなどを話し合うような形の研修を実施。年2回ほど外部講師による研修を実施。調理の常勤は全員参加。非常勤も参加することが多かった。みんなで集まり悩みなどを話し合うことを大切に、学ぶことよりも、職員間が絆を深める時間として使っている。相互理解を深めるようなテーマが多い。
B	外部研修や読んだ文献等を会議で報告し共有する形で実施。スタッフの人数が少ないため、園内研修という形にできず会議をするのが精一杯。常勤だけでなく、パート、非常勤、調理も必ず参加できるようにし、全員で共有することを心がけている。
C	1年に5回ほどの頻度でいくつかのグループに分かれて実施。年度によってテーマ別、キャリア別と分け方は様々。午睡中に実施するが、内容によっては回覧に記入する形を取ることも。正規職員、フルタイムアルバイト、嘱託、正規調理が参加。年度途中と年度末に報告会を実施。
D	月2回の研修があり、多種多様な研修に参加できる機会があった。各クラス参加可能な職員が参加。非常勤、調理従事者の常勤は参加。姉妹園が参加。一つのクラスにみんなが集まり実施。
E	3か月に1回グループごとに集まり、ベテラン、中堅、若手で年数別に分かれて、ざっくばらんに話し合う。主に正規職員が参加。会議録にまとめ回覧し、会議時に各グループがまとめを発表し全員に共有。春に会議でテーマを全員で確認し、1年を通して研修していく。少人数のグループで互いの見方を共有している。

表4 COVID-19 流行以前における園内研修の実施形態（園長）

W	職員をいくつかのグループに分けて、テーマについて話をした後、ディスカッションを行っている。外部研修のパワーポイントなどを使用。主に午睡の時間帯、大体1時半から2時半ぐらいを中心に実施。参加者は保育士、看護師、栄養士、その他非常勤の職員も参加したい職員は一緒に参加をして行っていた。
X	園内研修は係を置いており、係主導で進めることが多かった。どのような内容であっても、看護師も栄養士も必ず、専門職種からも出るという形にしていた。
Y	月に1回夜に60分から90分かけて行われる職員会議の時間を活用して園内研修を実施。救急法は単独で年に2回。常勤は救急法の参加は必須、非常勤は、希望する人はぜひという形で。職員会議を使った園内研修は、保護者で非常に絵本に詳しい方に絵本について60分話してもらった。また、テーマを決めて、小グループでディスカッションをし、それぞれが発表してまとめるという形を、職員会議90分うち60分ぐらい充てていた。グループ分けはクラス、経験年数もばらし、各グループに必ず、ファシリテーターの役割を置きディスカッションをした。テーマは、保育に関する事、それぞれの仕事観を知るなど。ポストイットに書き込み、それを全員に見える形にしたり、保育のマインドツリーを作ったりしていた。
Z	年に2回ほど、夜の時間90分ぐらいの時間を使って園内研修を行っていた。保育の内容だったり、職員の一般常識といった内容が多かった。あとは、研修の報告や、美術の学習など。外部の講師を招いて、発達、離乳食、絵本、就学に向けての育てたい力、歯医者さんの視点からなど、多岐に渡っていた。食事に関するところはもちろん、職員は全員出ているが、パート職員がなかなか出ない現状がある。

(2) COVID-19 流行下における園内研修の変化 (表 5・6)

COVID-19 流行下における園内研修の変化では、「頻度が3か月に1回くらいに落ちた」(A)、「感染拡大のため実施できない期間があった」(C)といった実施自体への影響が語られたほか、常勤のみの参加に変更 (A)、非常勤や姉妹園の参加がなくなった (D) など参加者を制限しての実施とした園、グループを更に細分化し密にならないよう配慮 (C)、少人数であるいは Zoom で (W)、集合研修はしていない (Y)、全員で集まっての会議は避けてきた (Z) と、密にならないよう配慮をしている発言がみられた。「時間を制限しながら今まで同様、グループで話し合うとか、全体で話し合う形の研修をやっている」(A)、「短時間でしっかり話し合うことを大事にしている」(E)からは、時間を短縮しても職員間で話し合うことを大切にしていることが分かる。「密な打ち合わせは変わらず行われている」(E)と情報共有を頻回に行っている園や、「毎日の申し送り、引き継ぎなどを園内研修と位置づけている」(Y)と、日々子どもの姿を共有し助言をしあうことを園内研修と位置づけている園もあった。また「見てほしい動画や研修内容に当たるようなものをそれぞれで受けてもらう」(X)と個別に動画を視聴する形をとっている園もあり、園の状況や実態に応じて方法を工夫して実施していることが推察された。また、「常勤のみの参加となり、クラス以外の非常勤と話す機会が失われ、今までのような近さが少し失われたと感じている」(A)、「シフト制のため、研修がないと会わない先生は会わない。コミュニケーション取りづらく情報の共有が難しい」(D)といった発言からは、COVID-19 流行以前の園内研修は、担当クラス以外の職員とのコミュニケーションの機会や情報共有の機会でもあったことが読み取られ、そうした機会が持てない状況下で職員間の距離を感じていることが窺われる。日々の何気ない会話や表情のやりとりを交わすことが、互いの状況を理解することや、安心感を得ることにつながると考えるが、そうした小さなやりとりの積み重ねができにくい状況であることが推察される。一方で「コロナで人間関係が希薄になりがちなか中、研修を通してクラスの枠を超えた職員間の関わりを深めることができた」(C)の発言からは、小グループに形態を変更しての園内研修がクラスの枠を超えた職員間の関わりを深める機会となっていたことが読み取られた。人間関係が希薄になりがちなか環境下だからこそ、多様な見方や考え方を共有できるような園内研修のあり方が同僚性を支えることにつながると考える。

表 5 COVID-19 流行下における園内研修の変化 (保育者)

A	頻度が3か月に1回くらいに落ちた。時間を制限しながら今まで同様、グループで話し合うとか、全体で話し合う形の研修をやっている。常勤のみの参加となり、クラス以外の非常勤と話す機会が失われ、今までのような近さが少し失われたと感じている。
B	なかなか外部研修にでられないが、ネットを通じての研修参加をしており、毎回会議のときに研修報告が出る。
C	感染拡大のため実施できない期間があった。グループをさらに細分化し密にならない形を工夫。コロナで人間関係が希薄になりがちなか中、研修を通してクラスの枠を超えた職員間の関わりを深めることができた。
D	非常勤や姉妹園の参加はなし。シフト制のため、研修がないと会わない先生は会わない。コミュニケーション取りづらく情報の共有が難しい。
E	短時間でしっかり話し合うことを大事にしてる。コミュニケーションは頻繁に取ってる。密な打ち合わせ (昼礼や会議)は変わらず行われている。

表6 COVID-19 流行下における園内研修の変化（園長）

W	コロナ下では少人数で、多くて4人までということと、あとはZoomで行っている。園には広いホールがあるため、ホールで事前に配った資料や、パワーポイントなどを使って行っている。
X	コロナ下でというところで、周知がなかなか難しいところがあったり、勤務の体制がずれたりする時期もあり、園の職員のLINEを作り、その中に見てほしい動画や、研修内容に当たるようなものを、それぞれで受けてもらうことをしていた。その内容をまた園内で持ち込んでということではできておらず、流しっぱなしというところではあったが、そうした共有の仕方でも進めた。園内研修は、栄養士は全て、どのような研修であっても、出ている状況。内容によって、保育士だけ集めたりというときには、今回は大丈夫ということもあるが、ほぼ基本的に出ている状況。
Y	コロナ感染が始まってからは、集合研修はしていない。毎日の申し送り、引き継ぎなどを園内研修と位置づけて保育士同士が子どもの姿を共有する時に子どもの姿の意味を考えて、保育の手立てや他の保育士からのアドバイスをもらうようにしている。主任保育士が各クラスの申し送りの時に入ってリーダーとして、話を進めている。午睡の時間に行っているの、時間の使い方が上手くなったと感じている。
Z	コロナになって、大勢で集まるのが難しくなり、全員が集まったの会議は極力避けてきた。夕方からの時間を使うことがちょっと難しくなってきたので、午睡をしている時間、1時半から2時半ぐらいまでを使って、職員会議やクラス会議、行事前の打ち合わせだったりをやってきた。

(3) COVID-19 流行下における協働の変化（表7・8）

1) 保育者へのインタビュー

COVID-19における協働の変化では、調理従事者との協働について「会社の決まりがあり、毎日のように食事を見に来てくれ食事介助に入っていたのができなくなった」(A)、「コロナ前は調理が保育に入り、子どもの姿を理解していたが、しばらくは入れなくなった」(D)と、調理従事者がCOVID-19流行以前のように子どもと触れ合う機会をもてないことが語られていた。さらに「調理は具体的な状況が分からず、互いに申し訳無さがある」「調理は子どもの姿のイメージがしづらく、難しさがあると聞いている」(A)と語られ、子どもの姿を伝えきれない或いは理解しきれないことでの保育者・調理従事者双方の複雑な思いが感じられる。Dは、「保育士サイドからも栄養士サイドからもまた（保育に）入りたいと声が出て」と語っており、栄養士が子どもとの関わりを通して子どもの姿を理解することの大切さを、COVID-19流行以前から、保育者・栄養士共に感じていたからこそその言葉であると推察する。Eは「調理室とはフロアが異なることもあり、こうなんですって、気軽に言えたところを、やっぱりどうしても電話での対応が多い。顔を合わせることも大事なのかなと今年は思っている」と語っており、些細な情報交換を気軽にできないことでの意思疎通の難しさがあることが窺われる。顔を合わせたコミュニケーションは、互いの思いや求めていることを表情や間合いから状況を読み取りうる。協働はそうした小さなやりとりの積み重ねの上に成り立っているとも言えよう。

職員間の連携については、Dは「コロナ初期は在宅勤務もあり、クラス内でも会わない先生がいた。情報の共有が難しいと感じた」と語り、会えないことでの担任間の情報共有の難しさがあったことが読み取れる。Cは「極力、他のクラスとの関わりを意図的につくらないようにしたことで、互いの保育を気にかけてたり、連携を取ることが難しくなった」と語り、クラス間の関わりがもてない状況では、園全体の子どもの様子を体感的に理解できず、組織全体で一人ひとりの子どもを理解し、互いの保育を支えていくことが難しくなることが予想される。また、「休憩時は黙食になった」(B)、「休憩時は黙食であまり話をしない。プライベートでお茶をすることもできなくなった」(C)と職員間が交流する機会がインフォーマルな場も含めて減ったことが語られていた。他方で、Eは「休憩は少人数で飲

表7 COVID-19 流行下における協働の変化（保育者）

A	協働で一番変化があったのは行事。コロナ下で互いの得意分野を生かして隙間時間を見つけて連携をとるのがみんな上手になった。食事では調理が子どもと触れ合うのは15分以内、1メートル離れてという会社の決まりがあり、毎日のように食事を見に来てくれ食事介助に入っていたができなくなった。その分、昼礼で担任が喫食状況を伝え、次のメニューのサイクルで改善という感じで連携をとっている。調理は具体的な状況が分からず、互いに申し訳無さがある。調理は子どもの姿のイメージがしづらく、難しさがあると聞いている。
B	休憩時は黙食になったが、帰る間際の時間などマスクをした状態のときに、職員間で子どものことなど、今までより話せるようになった。調理従事者とは、アレルギー対応を中心に情報共有し、献立は園長・調理従事者・担任・看護師が集まり、全部確認している。連携はコロナ前と変わらず今まで通り行うようにしている。
C	休憩時は黙食であまり話をしない。プライベートでお茶をすることもできなくなった。シフト勤務ということもあり、交流の機会はこの2年で減った。緊急事態宣言中は職員は3グループに分けての交代勤務、2週間近く顔を合わせない職員もあり、担任がすれ違い、メールやノートでの引継ぎを余儀なくされた。極力、他のクラスとの関わりを意図的につくらないようにしたことで、互いの保育を気にかけてり、連携を取ることが難しくなった。アルバイトさんが消毒等やってくれ、担任は保育に集中でき、コロナ前には得られなかった人への有難さや助けられていることを改めて感じるようになった。
D	マスクをしているため、目だけだと意思疎通が難しく、声を大きく出して伝え合うようになった。コロナ前は調理が保育に入り、子どもの姿を理解していたが、しばらくは入れなくなった。コロナ前は毎月1回はクッキングをしていたので、保育士と栄養士で分けるんじゃなくて、みんなで協力して保育していくというふうにしてきた。冬ころから保育士サイドからも栄養士サイドからもまた入りたいと声ので、入るようになった。コロナ初期は在宅勤務もあり、クラス内でも会わない先生がいた。情報の共有が難しいと感じた。保護者対応が崩れたことが何件もあり、ノートを作り視覚的に引継ぎをした。
E	昼礼で各クラス1名、調理から1名、情報共有しており、コミュニケーション面は色々とれている。休憩は少人数で飲み物を飲んだらマスクして、ちょっと会話をするような感じで、そこまですごく希薄になった感じはしない。非常勤もいるが、それぞれが意識して助け合って情報共有している。消毒は非常勤に助けられている。コロナ下だから、生み出されているものがある。調理室とはフロアが異なることもあり、こうなんですって、気軽に言えたところを、やっばどうしても電話での対応が多い。顔を合わせることが大事なのかなと今年は思っている。

表8 COVID-19 流行下における協働の変化（園長）

W	そもそも、みんなで常に協働しているため、そんなに変化はあったように感じていない。ただ、感染予防というところでは特に気をつけており、必要な対策を取った上で日々、皆と過ごしている。
X	会議を2部制にしたりとか、共有することの難しさがあった。集まったりすることがあまりいいと思わない職員もいたりとか、色々な意見がある中で、どういうところで諮るかがすごく悩ましいところではあった。毎日昼会というものを行っており、そこには参加できる職員には来てもらうという形で、場所を変えたりして、廊下の広くて換気のいい場所で。集まって直接話すことの大切さというのはすごくあったので、変化があったかと言うと、実はないのかなというふうには思っていて、環境をどう整えるのかということにはすごく配慮してきたと思っている。
Y	職員の協働は、振り返ってみれば、特に大きな変化はない。SNSを使うというのも、コロナの前からクラスLINEで担任のグループはできていた。給食室もできているし、あるいは給食室のリーダーと、保育士のリーダーのグループLINEもあるので、そういうSNSも活用しており、大きく変わらない。やはり、対面で話し合うこと、顔を見ることというのが大事だよなというのも、それも変わってないと思う。
Z	コロナ下での協働の変化というところは、それほどなかったと思う。LINEについては、私の保育園でもクラス別のLINEとそれから全体のLINEは園長も入って、主任から下、職員が全員入っているLINEがある。パートの職員は入っていないが、情報共有にはそういうものも使っている。

み物を飲んだらマスクして、ちょっと会話をするような感じで、そこまですごく希薄になった感じはしない」「非常勤もいるが、それぞれが意識して助け合って情報共有している」と語り、職員全体が情報共有を意識していることで COVID-19 流行以前と関係性は大きく変わらないと感じていることが窺われる。また、「互いの得意分野を生かして隙間時間を見つけて連携をとるのがみんな上手になった」(A)、「帰る間際の時間などマスクをした状態のときに、職員間で子どものことなど、今までより話せるようになった」(B)では、時間の使い方を工夫して連携や相互理解を図っていることが語られていた。「アルバイトさんが消毒等をやってくれ、担任は保育に集中でき、コロナ前には得られなかった人への有難さや助けられていることを改めて感じるようになった」(C)、「消毒は非常勤に助けられている。コロナ下だから、生み出されているものがある」といった語りからは、困難な状況だからこそ連携の大切さを感じていることが推察された。

2) 園長へのインタビュー

COVID-19 流行下における協働について、「そんなに変化はあったように感じていない」(W)、「変化があったかと言うと、実はないのかなというふうには思っていて」(X)、「職員の協働は、振り返ってみれば、特に大きな変化はない」(Y)、「コロナ下での協働の変化というところは、それほどなかったと思う」(Z)と、4名ともに変化を感じていないことが語られていた。Xは「集まったりすることがあまりいいと思わない職員もいた」と語る一方で「集まって直接話すことの大切さというのはすごくあった」とも語っており、職員の不安と園長の思いとの齟齬に悩んでいたことが読み取れる。対面で話すことの大切さについては、Yも「対面で話し合うこと、顔を見ることというのが大事だよねというのも、それも変わってないと思う」と語っており、連絡は SNS を用いることができるが、協働という点では顔を合わせる大切だと考えていることが読み取られた。

(4) 感染症対策と食の場のコミュニケーションの両立 (表9・10)

1) 保育者へのインタビュー

食の場での感染症対策について、「しゃべるのはちょっと今の時期はっていうので、お話はして」(A)、「お話をして食べることによってお友達にも自分にも菌が入ってしまうっていうのもお話して」(E)と、幼児クラスでは子どもに食事時の会話を控えることを説明したことが語られていた。また、「お話よりも食べることに集中しようってところは声をかけるようになっている」(C)、「黙食ではないが、食べることに集中するよう伝えた」(D)の語りからは、食べることに意識を向けるようにすることで、食事時の会話を避けるよう配慮していることが読み取れる。Dは「おいしいとか、こういう味がするねっていうふうに子どもたち同士で話したがる様子とか、小声で話す技があったりして、見ていて酷なことをしているなっていうので」「楽しみを奪ってまで食べてもらうのもなっていうので、そういうところでどう関わればいいのかっていう、もどかしさっていうのはすごい感じていた」と語り、子どもたちなりに気を遣っている姿を心苦しく思い、感染症対策を優先せざるをえない中での葛藤が読み取れる。さらにDは「最初の頃は、こっちも、どうコロナに対して対策すればいいのか分からなかったの」と語っており、COVID-19 流行初期は、どの程度配慮したらよいか迷いがある中での対応だったことが窺われる。また、Eは「しゃべらないことによって、大変みんな早く食べ終わる、食べることに集中するみたい。そこがちょっと申し訳ないんですけども。でも、逆にすっきり終わって、その後たくさん遊べるみたい。前向きに考えると、すごくそういうのができたのかなっていうの

表9 感染症対策と食の場のコミュニケーションの両立（保育者）

A	<p>幼児は今までは1テーブル6名だったが、斜めにして座るため1テーブル2名とし、今まで33名一斉に食べていたところを3回に分けて食べるように。しゃべらない分、早く食べるようになり、どうにか回せていた。子どもたちには、しゃべるのはちょっと今の時期はっていうので、お話をして。その分、食事について友達と話すっていう経験は忘れてほしくないと言任間で話して、夕方の時間に毎日5分ずつぐらい、きょうのお昼ご飯、どんなところがおいしかったとか、こんなのが好きだったっていうのを子どもたちに発表してもらって時間をつくって、そこで子ども同士でご飯について語り合うのを、食事できなくなった分を夕方の時間に持ってきてカバーできたところと。あと、今までは好きな友達といっぱい集まって食べていたところが、できなくなったので、お昼ご飯はこの子と食べたけど、他の子とも食べたかったなっていう声が上がったときは、おやつで、違う子と食べられるように組み、うまくいろんな子と食べる経験も、時間をかけてですけど、できるように工夫はした。</p>
B	<p>1・2歳児クラスでは食事中にしゃべらないことはできないため、今、2歳児クラスは自分で手元に手を持って行って洗うようになったんですけど、それが顔を洗うまでに発展して、顔をきちんと洗って、手首だけじゃなくて、肘まできちっと洗うって言って、ちょっと意外な展開だった。こちらが何も言わなくても、自分たちで丁寧な手洗いをしている。ここ数か月でものすごく上手になって、それも自分たちでちゃんと袖を上げて、先生、袖上げるんだよねって言うてくれて、前はほんとに長袖着ていて、すぐ着替える子、多かったんですけど、今はびじょびじょになることもなく手洗いが徹底されてきたなというのは、このコロナでできたことなのかなって思っている。</p>
C	<p>幼児は食べることに集中するよう声をかけるようにしている。幼児に関しては、やっぱり絶対駄目とはもちろん言わないけれども、お話よりも食べることに集中しようってところは声を掛けるようになっていて、私、今、クラスの担任をここ数年持っていないので、ついお部屋に用事があるって行くと、子どもたちや先生たちにいろいろ話しかけちゃうけれども、先生、静かにするんだよって言われちゃったりとかして、今まであんなにいっぱいべらべらしゃべって、全然食事止まった子たちがそんなふうになるなんて、すごい時代になったと思いつつ過ごしている。でも、やっぱり楽しい経験をしてほしいって思いで取り組んだのが、食育の取組みで、食にちなんだ手作り遊具やペープサートを園内研修をかねてつくり、子どもたちに披露した。</p>
D	<p>コロナ前は幼児クラスは一つのホールで食べていたが、一クラスずつ交代で食べる形に。交代の間に椅子や机の消毒をし、6名テーブルを3名に。しゃべらないとは言わないけど、ちょっと、少し食べることに集中してっていうふうには伝えていた。最初の頃は、こっちも、どうコロナに対して対策すればいいのか分からなかったんで、しゃべらないでって言って、ほんと無言みたいな感じで。でも、おいしいとか、こういう味がするねっていうふうに子どもたち同士で話したがる様子とか、小声で話す技があったりして、見ていて酷なことをしているなっていうので。なので、しゃべらないでっていうふうには最終的には言わないで、大きな声でお話しないでっていうふうには伝えてたりしていた。楽しみを奪ってまで食べてもらうのもなっていうので、そういうところでどう関わればいいのかっていう、もどかしさっていうのはすごい感じていた。</p>
E	<p>食事時は向かい合わないように。向かい合う場合はパーテーション使用。子どもたちには、緊急事態宣言が明けて登園したときに、コロナでこういう状況だ、お話をして食べることによってお友達にも自分にも菌が入ってしまうっていうのもお話しして、なので静かに食べるっていうのを一応徹底はしていた。でもどうしてもお話ちょっとはしちゃう部分もあるので、小さな声で、でも、基本はしゃべらないみたいなのは一応守って、心苦しいですけど、一応話してやっていました。その中で、しゃべらないことによって、とてもみんな早く食べ終わる、食べることに集中するみたいな、そこがちょっと申し訳ないんですけど、でも、逆にすっきり終わって、その後たくさん遊べるみたい。前向きに考えると、すごくそういうのができたのかなっていうのはある。</p>

はある」と子どもたちが食事中に会話ができないことへの申し訳なさを抱きながらも、早く食べ終わられることで遊ぶ時間の保障につながると、状況を前向きに捉えていることが読み取れる。食事中の会話を避けなければならない状況は変えることができないものであり、そうした中で、保育者は子どもにとっての肯定的な意味を見出さざるをえない状況であることが窺われる。Aは「食事について友

表 10 感染症対策と食の場のコミュニケーションの両立（園長）

W	1台のテーブルに2人向かい合わせで座るようにしている。子どもの頭の高さより高いパーテーションを立てて食べるようにしている。一緒に食べている人の顔が見えるので、小さな声での会話ができるようにもしている。
X	食事の場での、コミュニケーションの楽しさは、こういう状況から、本当に感染症対策をした上での両立は、実は難しいのかなと捉えていて、食事を食べる前の段階から食材のカードであったりとか、必ず食べることに對する導入みたいなものを行っていて、これはコロナ下関係なくやっている。あとは献立の中の郷土料理の話をしたり、努めて以前よりも積極的に担任のほうで心がけてしている。
Y	話す声が大きくならないようにというのは、それはコロナ下の前からも言っていることなので、特に新しい指導というのは、子どもに対してはしていません。子どももそういう意味では変わっていない。
Z	コロナ前だと、子どもたちと一緒に食事をしながら、ちょっと子どもたちが食べが進まないかなと思うと、先生も食べてみようとか言って、お皿からちょっと食べてみて「わあ、おいしい」なんて言うと、子どもたちが「僕も僕も」なんて小さい子どもたちが食べたりしていたが、今は職員がマスクをしており、なかなか表情とかも伝わりにくかったり、子どもと「おいしいね」という共有がマスク越しだとうまく伝わらなかつたりというところは、1つ心配としてはある。食事に対する興味を持たせる意味で、コロナ前までは赤い栄養と緑の栄養とか話もしていたが、給食の職員が部屋に行くことが難しくなってしまった状況の中で、少しそういうことができなくなっていたのを改めて感じた。

達と話すっていう経験は忘れてほしくない」と担任間で話し」と述べ、食事について子どもどうしで話す時間をつくることや、一緒に食事をするメンバーを工夫するなど、可能な範囲での配慮を行ってきたことを語っていた。こうした語りからは、食の場を栄養摂取の場としてだけでなく、そこに付随するコミュニケーションも含めて捉えていることが読み取れる。COVID-19 流行下といった困難な状況での食の場でのコミュニケーションは、保育者が葛藤を抱きながらも、子どもにとっての経験の意味を捉え直し、子どもにとって最善となるよう保育者の願いをもつての配慮に支えられていることが推察された。

2) 園長へのインタビュー

園長へのインタビューでは、食の場のコミュニケーションについて、「(パーテーションを立てて)一緒に食べている人の顔が見えるので、小さな声での会話ができるようにもしている」(W)、「話す声が大きくならないようにというのは、それはコロナ下の前からも言っていることなので、特に新しい指導というのは、子どもに対してはしていません」(Y)と語り、声の大きさに配慮することで食事の会話自体は制限していないことが読み取られた。一方、「食事の場での、コミュニケーションの楽しさは、こういう状況から、本当に感染症対策をした上での両立は、実は難しいのかなと捉えていて」(X)と食の場での感染症対策とコミュニケーションの両立の難しさを語る声もあった。また、Zの語りからは、保育者が食べる姿を見てもらうことで子どもの食べる意欲を引き出す機会がもてなくなったことや、表情を通じた気持ちの共有がマスク越しではできない状況があり、子ども－保育者間の食の場でのやりとりの質の変化を心配していることが読み取れる。さらに、Zは、調理従事者が保育室に入ることが難しい状況にも触れ、調理従事者とのコミュニケーションを通して食に対する関心を抱く機会をもてないことに懸念を抱いていた。食の場では、子どもどうしのコミュニケーションのみならず、子ども－保育者のコミュニケーションの制約がある中、やりとりの質的な変化が起こっていることも推察される。そこから生じている影響はどのようなことなのかを考え、子どもにとっての経験の保障を考えていく必要があるだろう。

4. 総合考察

(1) コミュニケーションの制約と協働性

職員間で顔を合わせて話す機会が変容したことにより、今までのような近さが薄れたことや情報共有が難しいといった語りがみられた。また、休憩時の黙食やプライベートで同僚と食事をするのがなくなったことなど、インフォーマルな場面でのコミュニケーションの変化を語った保育者もいた。インフォーマルな場面での会話では、子どもの姿を共有することや悩みごとへの共感や励ましといった仕事に関することにとどまらず、自分の趣味や家庭での出来事など職務以外のことも含めた多様な話題が共有されることもあろう。何気ない会話の中で同僚の考え方や感じ方、持ち味などを理解していく過程は、その同僚とどうかかわるか、互いの得意分野は何かといった相互理解の基盤となる小さな情報を積み重ねていく機会であると考えられる。一人ひとり異なる個性をもった人間に、どのように関わり、どう仕事を分かち合っていくのか、そのほどよいバランスをとるためには、日頃のコミュニケーションを通じて互いを知るプロセスが重要な鍵となるだろう。フォーマルな場での情報共有が大切であることはもちろんのことだが、インフォーマルな場でのコミュニケーションもまた、共に保育をつくっていく仲間として互いを知る重要な意味をもつものと考えられる。学校現場での調査では、インフォーマル・コミュニケーションは職員が安心して働ける職場となる一助となる可能性（永田・赤坂，2021）が示唆されているが、こうした点は保育現場においても通底するものであると考える。安心感をもって働くことは、保育者自身が自己発揮しながら、子どものためにもっと保育をよくしようと主体的に考え保育を創造していくことにつながることである。保育者同士が良い人間関係であると、子どももその雰囲気を感じ、安心感をもって生活していくものである。しかし、職場によって程度の差はあるものの、同僚とのインフォーマルなコミュニケーションの場に制約が生じている現状の中、保育者間の相互理解の場を意識的に保障していくことが求められよう。

そうした場の一つとして、園内研修が挙げられる。インタビューでは、COVID-19 流行下における園内研修は少人数で話し合うことや、短時間でも子どもの姿を共有することなど、従来の方法にとらわれず各園で工夫をしながら実施されていることが語られていた。また、COVID-19 流行以前と変わらず密な打ち合わせを大切にしている園や、日々子どもの姿を共有し助言しあうことを園内研修と位置づけている園もあった。全員が同じ場所に集まり長時間での研修実施が難しい状況であるからこそ、組織にとって必要な学びは何であるのかを考え、協働性を深める場となるよう、園内研修の方法やあり方を再考することが求められるのではないだろうか。COVID-19 流行以前と比較して、保育施設における職員間の連携と情報共有は増えているという調査結果もあり（松田，2022）、子どもの体調についての情報共有や感染症対策の業務での連携などで、保育者の負担感が増えていることも予想される。食事時間だけでも、消毒、パーティションの設置、密を避けての食事を行うための時間調整や環境設定など、これまでよりも業務量が増えていることはどの園でも共通していることであろう。インタビューでは、そうした困難な状況だからこそその連携の有難さを感じている語りもみられた。互いに感謝することや大変さを思いやる気持ちが連携の支えとなっていることも事実であろう。保育者自身も安定感をもって仕事ができるようにするためには、協働的な関係の構築がその支えとなっていくと考える。

(2) 保育の内側で起きている変化

保育者からは、職員間の連携の変化や調理従事者との協働の変化が語られていた。隙間時間を使って連携をとることや連携の有難さへの気づきなど肯定的な変化が語られたほか、調理従事者が保育室に入ることに制約が生じたことで、子どもの食事の様子を直接見るができなくなったことや、子どもとの関わりをもてなくなったことなど、困難な側面についても語られていた。一方、園長からは、4名ともに協働の変化を感じていないことが語られていた。本研究では異なる園に勤務する園長・保育者を調査対象としたことから、単純に園長と保育者とを対比させて捉えることはできないが、園長は園全体を俯瞰的に見つめる立場であることから、園全体の枠組みとしては変わりなく協働がなされていると捉えうるのだと推察する。その一方で、保育者は保育の内側にいる当事者であるからこそ、感じる変化があるのではないだろうか。例えば、ミーティング等で喫食状況を伝えるといった形での連携は COVID-19 流行下においても変わらず行われている場合が多い。調理従事者は子どもの食べる姿を見る機会がなくとも、食事を提供することは可能である。しかし、食事を提供することの内実には様々なレベルがあるだろう。調理従事者が子ども一人ひとりの育ちの姿を直接観察し、子どもの食べる姿を具体的に思い浮かべることができるか否かは、一人ひとりへの調理上の配慮となって表れ出てくるものである。子どもがどのような表情をして、どのような口の動かし方をして、どのように感じながら食べているのかといった具体的な姿までを口頭で伝えることには限界がある。「良く食べていた」だけでは伝わらない姿の中に、具体的な配慮の材料となるものが含まれているはずである。子どもの姿に日々直接接している者が感じることもあり、そこでの子どもとの接面で感じるものが保育の質に直結する事柄であると考え。外面的には表れ出てこない配慮の積み重ねが子どもの育ちを支えており、そこには子どもの姿を中心とした協働が必要である。インタビューでは、職員どうしが顔を合わせることの大切さが語られていたが、互いの保育を気にかけて、連携をとることは、子どもへの細やかな配慮の実現に関わることであろう。そうした細やかな配慮や連携のもとに、子どもの育ちは支えられていると考える。人との関わりでの育ちの基盤が培われていく時期だからこそ、子どもにとっての日々の経験の充実を考えていかなければならない。COVID-19 流行下において及ぼされている影響は、すぐに目に見えるものばかりではないと考える。子どもと保育者の間で、そして職員間で生じている変化は何であるのかを外面的な側面だけでなく、内側で起こっていることを質的に捉えていくことが、これまで以上に求められるのではないだろうか。

現在子どもに起こっていることの意味を捉えようとするのが、子どもにとっての経験の意味を問い直し、一人ひとりにふさわしい経験を考えることへとつながるだろう。丁寧に子どもの育ちの姿を捉え続けることが、一人ひとりに応じた配慮へとつながる。人間関係の育ちは目に見えにくいものであり、人的環境を中心とした多様な配慮をもとにした日々の小さな積み重ねを経て成り立つものである。COVID-19 流行下という困難な状況だからこそ、子どもの姿を丁寧にみつめ、子どもにとってふさわしい経験は何かを園全体で考えながら配慮を重ねていくことが、困難な状況の中での子どもの育ちを保障することにつながるのではないだろうか。

要約と課題

本研究では、保育者・園長を対象としたグループインタビューの分析を通し、COVID-19 流行下における人間関係と協働の諸相について、食と園内における学びを中心とした視点から検討した。その

結果、子ども同士、子ども－保育者、保育者同士といった複数の側面でのコミュニケーションの制約が生じていることが浮き彫りとなった。研修形態の変更といった外形的な変化のみならず、保育に直接的に携わっている者だから感じられる外面には見えにくい変化や違和感が生じており、葛藤や不安、心苦しさとといった思いを抱えながら子どもにとってふさわしい経験を考えていることが推察された。また、困難な状況だからこそ、人間関係の育ちを支える協働が重要となると考える。

本研究ではグループインタビューを研究手法として用いたが、特に園長を対象としたグループでは、園長という立場上、COVID-19流行下における負の側面については語られにくい状況であったことも推察される。グループインタビューという手法の限界を加味し、今後は個別のインタビュー等を通して園長固有の複雑な心情を掘り下げて検証することが必要であると考え。また、COVID-19感染拡大下での様々な制約のある中での調査となり、協力を得たのは社会福祉法人立の園の園長のみであったため、今回の結果は限定的な状況である可能性も留意する必要がある。例えば公立園や株式会社立の園では共通の対応が定められている場合や園独自の対応に限界があるなど、社会福祉法人立の園とは異なる強みや課題をもつ可能性が想定されるため、今後は様々な属性の園を対象とした調査が必要であると考え。また、今回の調査では園の規模や経営主体等、園の構造的性質のもたらす影響を検討するまでには至らなかったため、今後は協働に関連する要因を焦点化した上での調査対象の選定を行い、研究を深めていきたい。

COVID-19の影響が長期化することが予想される中、保育現場で起こっていることを保育の内側から捉え、その課題を園内外の者が共に感じ取り、変化の激しい状況の中で子どもにとっての経験の意味をとらえ続けていくことが今後の課題であると考え。

謝 辞

本調査にご協力いただきました園長先生・保育者の皆様に心から御礼申し上げます。

注

- 1 中坪（2018）は、「協働型」「伝達型」という表現で園内研修の形態や方法に関する2つのタイプを説明している。「協働型」園内研修とは、経験年数、常勤・非常勤、管理職の有無を問わず、保育者が相互に対話するような形態を指し、保育者の主体性が認められるため、モチベーションの維持や向上につながるともに、同僚同士の連携を密にすることで相互の悩みを共有することができるものである。「伝達型」園内研修とは、園長、主任、経験年数の多い一部の保育者などが中心となって、他の保育者に一方的に知識・技術・情報を伝えるような形態を指し、外部講師を招聘し、職員全員で話を聴く機会を管理職が組織する研修も「伝達型」としてとらえることができる。

引用文献

遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子・田中浩二（2022）乳児保育における食事援助のプロセスの質を支える諸要素の検討. 保育者養成教育学研究. 6. 1-11.

厚生労働省（2018）保育所保育指針解説. フレーベル館.

厚生労働省（2020）保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会 議論のとりまとめ（概要）, <https://www.mhlw.go.jp/content/000647605.pdf>, 2022年2月16日最終アクセス

松田知明（2022）保育施設における新型コロナウイルス感染症対策と組織的連携について—教員免許状更新講習

- 受講者を対象として一. 羽陽学園短期大学紀要. 11(4). 255-270.
- 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.
- 永田佳奈子・赤坂真二 (2021) 中学校教職員間のインフォーマル・コミュニケーションに関する事例研究—教職員の職場風土認知と被援助志向性に着目して—. 日本学級経営学会誌. 3. 23-33.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説. フレーベル館.
- 中坪史典 (編著) (2018) 保育を語り合う協働型園内研修のすすめ. 組織の活性化と専門性の向上に向けて. 中央法規.
- 野澤祥子・淀川裕美・高橋翠・遠藤利彦・秋田喜代美 (2016) 乳児保育の質に関する研究の動向と展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要. 56. 399-419.
- 野澤祥子・淀川裕美・菊岡里美・浅井幸子・遠藤利彦・秋田喜代美 (2020) 保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討. 東京大学大学院教育学研究科紀要. 60. 545-568.
- 小田幹雄・橋浦孝明 (2022) 保育現場の新型コロナウイルス感染症対策の現状について (第2報)—食事場面の配慮について—. 羽陽学園短期大学紀要. 11(4). 271-283.
- OECD (2021) Starting Strong VI: Supporting Meaningful Interactions in Early Childhood Education and Care. OECD Publishing, Paris.
- 大豆生田啓友・三谷大紀・高嶋景子 (2009) 保育の質を高める体制と研修に関する一考察. 人間環境学会紀要. 11. 17-32.
- 富岡麻由子 (2010) 子どもの食事場面に関する研究レビュー—かかわりの場としての機能に着目して—. 有明教育芸術短期大学紀要. 1. 44-55.
- 外山紀子 (1998) 保育園の食事場面における幼児の席とり行動: ヨコに座ると何かいいことあるの?. 発達心理学研究. 9(3). 209-220.
- 上村晶 (2019) 保育者の熟達化と子ども理解の関係性に関する研究(3). 桜花学園大学保育学部研究紀要. 19. 29-44.

付記

本研究は, JSPS 科研費 21K02412 の助成を受けたものです。

(えんどう じゅんこ 初等教育学科)
(おの ゆき 大妻女子大学短期大学部)